

```
Range("B3:C3").Select
Selection.NumberFormatLocal = "¥#,##0_);[赤](¥#,##0)"
```

図 11 B3～C3セルをSelectメソッドで選択。選択範囲を表すRangeオブジェクトのNumberFormatLocalプロパティで、そのセルに対する表示形式を設定できる。設定値は、「セルの書式設定」画面の「表示形式」タブの「ユーザー定義」で表示される書式記号だ

●マクロ「書式設定1」を修正する

```
Sub 書式設定2()
    With Range("B2:C2")
        .Font.Bold = True
        .HorizontalAlignment = xlCenter
    End With
    Range("B3:C3").NumberFormatLocal = "¥#,##0_);[赤](¥#,##0)"
End Sub
```

図 12 「書式設定1」のSubプロシージャをコピーしてコードウインドウの下側に貼り付け、プロシージャ名を「書式設定2」に変更。そのコードを修正して簡潔にした。前回の入力マクロと同様、セルを選択することなく書式だけを変更する形にしている

```
With Range("B2:C2")
    .Font.Bold = True
    .HorizontalAlignment = xlCenter
End With
```

図 13 「With」の対象にB2～C2セルを表すRangeオブジェクトを指定。このオブジェクトを対象に、文字列を太字にする設定と水平方向を「中央揃え」にする操作を実行している。HorizontalAlignmentプロパティ以外の配置の設定は、不要なので全てカットした

```
Range("B3:C3").NumberFormatLocal = "¥#,##0_);[赤](¥#,##0)"
```

図 14 表示形式を設定するコードも、B3～C3セルを表すRangeオブジェクトに直接NumberFormatLocalプロパティを指定する形に修正した。これによって、対象のセル範囲が選択されず、表示形式だけが変更される

●相対参照で記録する

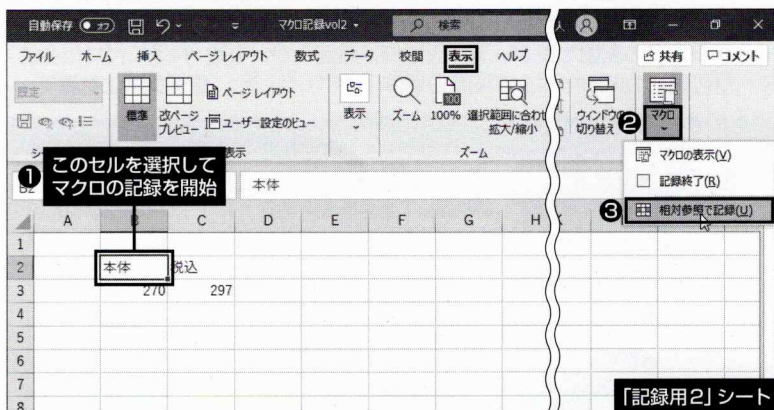


図 15 「記録用2」シートを開いて、やはりB2セルを選択し、「書式設定3」というマクロ名で新しいマクロの記録を開始する。さらに、「表示」タブの「マクロ」の「▼」から「相対参照で記録」を選ぶ。以下、マクロ「書式設定1」と同じ操作を記録していく

ティの設定値はこの文字列だ。

このマクロ「書式設定1」のSubプロシージャを、前回の入力マクロと同様に修正し、簡潔にしてみよう。修正後のマクロ「書式設定2」は、やはり対象のセル範囲を選択せず、直接その書式を変更するプログラムにしている(図12)。

B2～C2セルを対象とする「太字」と「中央揃え」は、そのRangeオブジェクトを直接With～End Withの対象に指定して、その中でまとめて設定している(図13)。横位置以外の配置の書式は設定不要なので、全てカットした。B3～C3セルに対する表示形式の設定も、取得したそのRangeオブジェクトに直接設定する形に修正している(図14)。

相対参照でマクロを記録

マクロ記録では、書式設定などの対象は、基本的には全てSelection、つまり選択範囲を表すRangeオブジェクトになる。記録中に一度も選択セルを変えなかった場合は、処理対象のセルがマクロの中に記録されない。このマクロを実行すると、そのときに選択していたセル(範囲)に対して、記録した書式変更などの操作が実行されることになる。

一方、記録中に選択セルを変更した場合、通常はその選択対象が、常に特定のセル(範囲)を表す「絶対参照」で記録される。実行時に選択していたセルに応じて処理対象のセル(範囲)を変えたい場合は、「相対参照」で記録するとよい。

ここでは「記録用2」シートを開いて、事前にB2セルを選択。「書式設定3」というマクロ名で記録を開始し、さらに「表